

# 「アングロ・サクソンの欠如」 ＝アングロ・サクソンは人気が無い？

——ローズマリー・サトクリフの歴史小説からの一考察——

藤井香子

## 1. サトクリフと日本

イギリス児童文学史において、1950、60年代は20世紀児童文学の第2黄金期とされている。この時代に花開いた分野に歴史小説があり、その中でも、ローズマリー・サトクリフ(1920-92)はこの時代を代表する児童文学・歴史小説作家である<sup>1)</sup>。彼女は数多くの小説を残しているが、日本で最も有名なのは、おそらく『第九軍団のワシ』(1972)という日本語訳タイトルで知られる *The Eagle of the Ninth* (1954) に代表される「ローマン・ブリテン」3部作(または4部作)であろう。3部作の3作目にあたる *The Lantern Bearer* (1959) (『ともしびをかかげて』(1969))でカーネギー賞を受賞したことで、日本への紹介も始まったと考えられる。現に、日本語訳はこの3作目が最初の出版であり、3部作1作目の上記『第九軍団のワシ』の出版は、その3年後になる。

サトクリフは1992年に急逝するのだが、その死を受けたかのように、90年代後半から2000年代前半に日本語訳出版の波が再び訪れる<sup>2)</sup>。

サトクリフの小説の時代設定は、紀元前数世紀の新石器時代からエリザベス朝時代までと幅広い。また、歴史的事実を背景とした純然たる歴史小説もあれば、伝説等としてイングランドまたはヨーロッパで広く知られている逸話をもとにしている、ややファンタジー要素を含む小説もある。

本論では、サトクリフの歴史小説、特に古代の終わりから中世にかけてのヨーロッパを舞台にした18小説を概観し、彼女の小説にある特定の時代が設定されなかったことを明らかにし、そこから、現代サブ・カルチャーにおける西洋中世の受容／不受容の一側面を論じることを試みる。

## 2. サトクリフの作品とその特徴

下の表1は、本論で扱うサトクリフの歴史小説を、原作の出版年代や日本語訳の出版年代ではなく、物語の時代設定順に年表にしたものである。時代設定は中世であっても、伝説的な要素が多分に含まれる小説、例えば『ロビン・フッドの物語』(2004)や『ベーオウルフ 妖怪と竜と英雄の物語』(1990, 2002)、「アーサー王」シリーズ3作(2001)は、議論の対象外としている。

表1 サトクリフの歴史小説、物語の時代別年表

物語の時代	タイトル (日本語訳タイトル)	出版年(日本語訳出版年)	物語の舞台	コメント
紀元前??	1. <i>The Mark of the Horse Lord</i> (『王のしるし』)	1965 (1973)	カレドニア (スコットランド)	共通の特徴 <sup>3)</sup> カレドニア族, ダルリアット族
紀元前1世紀	2. <i>Sun Horse, Moon Horse</i> (『ケルトの白馬』)	1977 (2000)	ブリテン島	イケニ族 (ケルト) スコットランドへと逃れる
AD60	3. <i>Song for a Dark Queen</i> (『闇の女王にささげる歌』)	1978 (2002)	ブリテン島/属州ブリタニア	ブーディカの叛乱 伝説の女王を主人公とする珍しい例 女王の古代の心, 女王の生きた風土を描く
AD61-383	4. <i>The Capricorn Bracelet</i> (『山羊座の腕輪—ブリタニアのルシウスの物語』)	1973 (2003)	ブリテン島/属州ブリタニア	腕輪を中心にしたブリテンにおけるローマ支配の在り方の変遷を描く 時間が主人公
1-2世紀	5. <i>The Chief's Daughter</i> (『族長の娘—ヒースの花冠』) <sup>4)</sup>	1966 (2003)	ブリテン島/属州ブリタニア	ケルト部族
2世紀	6. <i>Outcast</i> (『ケルトとローマの息子』)	1955 (2002)	コーンウォール→ローマ	ケルトとローマの混血児が主人公 「居場所がない」苦しみと取り戻す心
3-4世紀	7. <i>A Circlet of Oak Leaves</i> (『樫の葉の花冠』) <sup>5)</sup>	1965, 1968 (2003)	スコットランド	ピクト人と戦うローマ軍
AD117の数年後	8. <i>The Eagle of the Ninth</i> (『第九軍団のワシ』)	1954 (1972)	ブリテン島/属州ブリタニア→スコットランド	今日, 歴史小説の第一人者と言われるサトクリフが初めて出現したと言える作品。いわゆる「ローマン・ブリテン4部作」の1作目 共通の特徴 ローマン・ブリテン時代の風俗・習慣を描き出す
AD300年代	9. <i>The Silver Branch</i> (『銀の枝』)	1957 (1994)	ブリテン島/属州ブリタニア	「ローマン・ブリテン4部作」の2作目 共通の特徴
AD343	10. <i>Frontier Wolf</i> (『辺境のオオカミ』)	1980 (2002)	スコットランド	「ローマン・ブリテン4部作」の4作目 それまでのローマン・ブリテン3部作とは異なる 主人公は自らの意思で行動を起こすことがほぼ不可能 個人と集団との関係, 集団の統率者の条件

AD410	11. <i>The Lantern Bearers</i> (『ともしびをかかげて』)	1959 (1969)	ブリテン島／属州ブリタニア	「ローマン・ブリテン4部作」の3作目 ローマ軍団のブリテン島撤退時 共通の特徴 カーネギー賞受賞作 (最初の日本語訳)
5世紀終わり	12. <i>Sword at Sunset</i> (『落日の剣』)	1963 (2002)	ブリテン島／属州ブリタニア	5, 6世紀のブリテン島のありさまを描いた歴史小説 後のアーサー王物語がすかし絵のように見える小説 共通の特徴 国家や人の結束を滅ぼすものは何か
6世紀後半	13. <i>Dawn Wind</i> (『夜明けの風』)	1961 (2004)	ブリテン島	「ローマン・ブリテン4部作」の続き、主人公はイルカの紋章付きの指輪を引き継いでいるケルト部族の生き残りの少年 自分の世界が壊滅するのを見てしまった主人公の衝撃 ただ一人の生き残りという過酷な運命を生きる
AD600頃	14. <i>The Shining Company</i> (『アネイリンの歌 ケルトの戦の物語』)	1990 (2002)	スコットランド	現存する最古の叙事詩『ゴドディン』をもとにした小説
9世紀	15. <i>Sword Song</i> (『剣の歌 ヴァイキングの物語』)	1997 (posthumous) (2002)	スコットランド, オークニー諸島, ヘブリディーズ諸島	追放されたヴァイキングの主人公 アイルランドへ 主人公の成長物語
10世紀末～ 11世紀初め	16. <i>Blood Feud</i> (『ヴァイキングの誓い』)	1976 (2002)	ヨーロッパ (ユトランド半島から黒海まで)	ヴァイキングにさらわれ奴隷としてアイルランドに売られた主人公 自分の主人と兄弟の誓いを立て、 ヴァイキング同士の凄まじい復讐の戦いに巻き込まれる
11世紀末～ 12世紀	17. <i>The Shield Ring</i> (『シールド・リング ヴァイキングの心の砦』)	1956 (2003)	湖水地方	最後までノルマン軍に抵抗する ヴァイキングの子孫 共通の特徴
11世紀末	18. <i>Knight's Fee</i> (『運命の騎士』)	1960 (1970)	イングランド	主人公が孤児から騎士になっていく成長物語 征服者ノルマン人と被征服者アングロ・サクソン人の融合 封建制度化の過程の人間関係の在り方を示す歴史物語

この表から明らかになる時代設定・舞台設定の特徴については、後に論じることとして、まずはサトクリフの歴史小説に共通して見られる特徴について論じてみたい。

特徴は、大きく2点にまとめることができる。一つは、「冷厳な歴史の本質」または「歴史の中に現れる光と闇の交替」である。彼女の小説の枠組みは、物語中事件が発生し、その事件の進行が主人公の内面とどの様な関わりを持っているかを示しつつ、その主人公の生き方を通じて、歴史と人生の持つ意味を浮かび上がらせるという複雑なものである<sup>6)</sup>。彼女は、個々人の人生は、歴史が形成されていく過程の中に埋もれてしまうこともありうる、という冷厳な事実を明示する。歴史の中で、ある一つの時代が終わり次の時代へと移っていく激動を、歴史の光と闇の交替として描き、その様な歴史の中で、人間が生きるとはどういうことなのかを、豊かな想像力と力強い描写で物語を紡いでいく。そのため、彼女が好む主人公像は、歴史の表舞台には名を残すこと無く、だが誠実で誇り高い人間として生きた個人であることがほとんどである<sup>7)</sup>。

二つ目の特徴は、「主人公の人生と成長」である。どの小説でも、主人公は、挫折、断ち切られた希望、絶望の日々といった非常に過酷な状況に置かれる。主人公は、心や身体に障害を持つ場合もあれば、己自身ではどうしようもない理由で与えられず、満たされず、飢え餓えた心を持つ場合もある。その様な主人公が、もう一つの同じような魂と出会い、自身の身に降りかかってくる様々な困難を共に正面から受けとめ、生きる道を切り開いていく間に、生きるに値する人生を生きるために自身にとって何が真に必要なかを発見し、自他への誠実さと尊厳を守ろうとする意志と誇りを甦らせるのである。

この二つの特徴が合わさる時、そこに描かれるのは、歴史の中における個々の「民族の血」では無く、「民族の融合」であると考えられる。民族が融合して新しい生き方が生まれること、そして連綿と続いていく歴史の中で変わらないものが確かにあること、その新しい生き方と変わらないもののほうこそが、サトクリフにとっては大切であったと考えられる。一例を挙げれば、*The Knight's Fee* (1960) (『運命の騎士』(1970))で、サトクリフは主人公の孤児ランダルの中に、一人の人間の魂の成長を描いたが、それは同時に征服者ノルマン人と被征服者サクソン人とが、一つの国民として同化していく過程を描いたことにもなる<sup>8)</sup>。

サトクリフの歴史小説は、遠い過去の遠い国の物語ではあるが、私達現代日本の読者に対しても強いメッセージ性を持つと考えられる。私達現代人は、ともすれば自分の生きていることの意味や人間としての責任の所在を見失いがちになるが、サトクリフの小説は「人は何によって生きるか」という大きな問題を私達に突きつけ揺さぶりをかける。物語中の主人公の「居場所が無い」苦しみは、形こそ全く違うものの、今を生きている私達の心情と響きあうものがあるように思えるからである<sup>9)</sup>。

その意味では、サトクリフの小説は決して色褪せることの無い、珠玉の歴史小説なのである。

### 3. アングロ・サクソンの欠如

以上が、サトクリフの歴史小説の特徴であるが、それを踏まえた上で彼女の小説の時代設定・舞台設定を詳しく検証すると、ある一つのことが明らかになる。それは、「アングロ・サクソン」時代に設定された小説の欠如である。

上記表1に挙げられたサトクリフの18小説のうち、3～11は、いわゆる「ローマン・ブリテン」の時代に物語が設定されている。紀元前1世紀、ローマ帝国の足音が海の向こう、大陸から聞こえて来る時代から、ローマ帝国属州ブリタニアになり Pax Romana (「ローマによる平和」) を享受していた時代を経て、5世紀、ローマ帝国崩壊前夜、遂にローマが軍団をブリタニアから撤収する時代までの約500年の時代の物語である。舞台となる場所は、主にブリタニア(現在のイングランド)だが、6と7、10はブリタニアでは無い。

この時代を舞台とする小説群は、「ローマン・ブリテン4部作」に代表されるように、児童文学作家サトクリフの代名詞ともなっている<sup>10)</sup>。最初はローマ帝国に抵抗しつつも、長い時の流れの中でローマ化されていくケルト系部族と、支配者という立場でありながら、帝国支配の中で被支配者のケルト系部族と血と文化を融合させていくローマ人——その二つの民族の間で、主人公は、最初は歴史の光の側に立っているのだが、500年の時間軸の中で気付けば歴史の闇の側に立っている。上で述べたサトクリフの小説の特徴が最も顕著な小説群であり、サトクリフの真骨頂である。

12と13は、5～6世紀、ローマが去った後、大陸からゲルマン系の民族(アングロ・サクソン人)の侵攻を受けて戦い、敗れ、最終的にはブリタニアから去ることになるブリトン人を描いている。特に小説12は、後のアーサー王伝説のモデルとなったと考えられているローマン・ブリトン人の将軍を主人公とする重厚な歴史小説である。この二つの小説における歴史の光は侵攻してくるゲルマン民族であり、闇は辺境に追いやられるブリトン人である。

15～17は、ヴァイキングを主人公とする物語ではあるが、舞台はイングランドではない。西は北の海を越えてアイルランドへ、東は東欧・ロシアを横断して黒海からコンスタンチノーブル(現・イスタンブール)へと、ヴァイキングが活動・活躍した広範囲な世界を舞台としているが、本論の主たる舞台イングランドでのヴァイキングの物語ではない。辛うじて、小説17は、湖水地方が舞台なのでイングランドと言えなくもないが、数百年に渡って生き延びてきたヴァイキングの子孫達が固有の文化を築いていた場所なので、純粋にイングランドと言えるかは、微妙なところである。

最後の小説18は、大陸から攻めてきてイングランドの支配者となったノルマン人に対して、被支配者の立場に立たされてしまったアングロ・サクソン人の血と文化の融合を描き、封建制度化が進む過程での人間関係の在り方を示す歴史小説となっている。ここでの歴史の光の側は大陸からのノルマン人であり、闇の側はアングロ・サクソン人である。

以上を表にまとめると、以下のようになる。

表2 サトクリフの歴史小説における歴史の光と闇の交替

小説番号	物語の時代	歴史の闇	歴史の光
3～11 (6, 7, 11 を除く)	紀元前1世紀～	ケルト系部族ブリトン人	ローマ人
	紀元5世紀	ローマン・ブリトン人	ゲルマン系アングロ・サクソン人
12, 13	5～6世紀	ブリトン人	ゲルマン系アングロ・サクソン人
17	11世紀末～12世紀	ヴァイキング	ノルマン人
18	11世紀末	アングロ・サクソン人	ノルマン人

そして、明らかになるのが、「アングロ・サクソン」時代に設定された小説の欠如である。5世紀から11世紀までを、イングランド史において Anglo-Saxon England と呼ぶが、その約600年余りに及ぶ一時代設定が、すっぽり丸々抜け落ちていたのである。

「海のオオカミ」と呼ばれたアングロ・サクソン人が大陸からイングランドに侵攻して来るローマン・ブリテン末期は描かれているし、アングロ・サクソン人がノルマン人に征服される時代も描かれている。前者は歴史の光であり、後者は歴史の闇という立ち位置である。光と闇、両方とも描かれているからそれでいいのではないか、という意見もありうるだろう。しかし、約600年に及ぶアングロ・サクソン時代には、ヴァイキングの侵略・定住という民族の存亡を脅かす大きな出来事が、何世代にも亘って断続的に起こり、イングランドという国家及び文化の形成に多大な影響を及ぼした。その時代を、サトクリフが物語の設定として利用しなかったのは、なぜなのか。

今日イギリスの学校で教えられる歴史は、一昔前にくらべれば、ずっとひらけて進んだものになりました。しかしいまだに歴史の教科書の大半は、1066年10月14日以降について念を入れて書くべきだという態度で書かれているように思われます。

三千年もあった先史時代のブリテンについては、ただの三ページほどがさかかっているにすぎません。(中略)

ローマ時代のブリテンについては、一章がついやされているのみですが、サクソン人や北方民族については、二章ないし三章があてられています。そして時代がずっとくただって、ノルマン人の征服のところまでくると、わたしたちははじめて袖をまくりあげ、ほんとうにまじめに歴史の勉強にとりかかるといふわけなのです。(『ともしびをかかげて』 p.421)

カーネギー賞受賞に際しての著者の言葉として、日本語訳『ともしびをかかげて』の巻末に載せられているサトクリフの言葉から、当時(1960年代)の英国における歴史教科書の一部が垣間見える。それから半世紀以上、時代は変わったと言えるだろうか。英国における自国の歴史教育が本論の主題では無いので、この点についてはこれ以上論じないが、翻って日本の中高生及び大学生に、英国の歴史、それも中世英国史について質問するとすれば、どれくらい詳しい答えが返ってくるのだろうか。

サトクリフは、サクソン人及び北方民族については、教科書で数章割かれていると言っているが、それではなぜ、彼女自身、アングロ・サクソン時代を小説の舞台として設定しなかったのか。作者が亡くなってしまっている以上、この問いに対しての答えは得られないであろう。筆者がこの疑問を抱くようになって20年近くになるが、残念ながら、サトクリフに直接問いを投げかけることは不可能になってしまっていた。

なぜ、サトクリフはアングロ・サクソン時代を、自身の小説の舞台として用いなかったのか。彼女にとって、アングロ・サクソン時代は歴史の光と闇の交替を描くには魅力がなかったのか。永遠の謎なのである。

#### 4. アングロ・サクソンは人気が無い？

サトクリフの小説における「アングロ・サクソンの欠如」は解けない問いだが、その他の分野における「アングロ・サクソンの欠如」は、また別の問題である。

近年、小説や映画にとどまらず、漫画・アニメ・ゲーム等のいわゆる「サブ・カルチャー」と言われる分野において、ヨーロッパ、特に中世ヨーロッパの様々な事柄が利用・応用されている。歴史上の人物や伝説上の人物、神話に登場する神々、彼らのアイデンティティーを明らかにする持ち物や出来事等々、網羅しようとしてもこの場では不可能であり、また本論の主旨でも無い。

しかし、こと「アングロ・サクソン」に関しては、その欠如が顕著であるということを主張することは重要ではないだろうか。何かしらのサブ・カルチャーに馴染みのある者は、「アーサー」や「マーリン」、「エクスカリバー」、「トール」等の単語には耳が慣れているであろう。たとえ、それらが表す本来のものを知らなかったとしても<sup>11)</sup>、経験として聞いたことはあるという反応が返ってくるのが大半ではないだろうか。

だが、「アルフレッド」はどうだろうか。あるいは、「アセルスタン」や「エドガー」は？そもそも、「アングロ・サクソン」という用語自体、どれほどサブ・カルチャーの分野で浸透しているのだろうか。

日本の大学生は、世界史を高校で選択した場合は、「アングロ・サクソン七王国」(Anglo-Saxon Heptarchy)という用語くらいは知っているであろう。だが、この用語も曲者で、まるで7つの王国がほぼ同時に栄えていたかのような錯覚を起こさせてしまう。が、実際の歴史は、それほど単純なものではない。ましてや、その7つの王国が、北の2つ(ないし3つ)はヴァイキングによって滅亡し、南の4つはお互いの併呑合戦で最終的には1つしか残らなかった、という歴史的事実を理解するには、それなりの専門的な学習を必要とする。日本の教科書の場合、次に学習するのは大抵、1016年のデンマーク王クヌートのイングランド王即位なのではないか。

しかし、上でも述べたように、アングロ・サクソン時代は600年余りもあったのである。その間には、大陸のフランク王国よりも学問が進んでいた王国やキリスト教の受容に関して開催された宗教会議、最初の歴史書を執筆した修道士、ヴァイキングの襲撃で焼け落ちてしまった修道院、ヴァイキングとの戦いで戦死し、後に聖人に列せられた国王——人も出来事も、600年分盛り沢山で、サブ・カルチャーに利用・応用されないはずが無い、というのが筆者の主張なのであるが、実際はほとんど耳にしたことが無い。

ましてや、「アルフレッド」(Alfred (849-899))は、ヴァイキングの侵攻を最後の最後でくい止め、最後のアングロ・サクソン王国である自身のウェセックス王国を滅亡の危機から救い、後のイングランド統一の礎を築いた歴史上の人物であり、アングロ・サクソン時代を代表する英雄である。それを証拠に、歴代英国国王・女王の中で、「大王」(the Great)という尊称がついているのは、アルフレッドのみである。

にもかかわらず——「アルフレッド」もその他の名前も出来事も、アングロ・サクソン時代のものは、サブ・カルチャーの分野では現れない。歴史小説というジャンルに限定しても、1960年代のウォルター・ホッジズの2作品『アルフレッド王の戦い』『アルフレッド王の勝

利』<sup>12)</sup>以降の半世紀、アングロ・サクソン時代そのものを舞台とした作品は、ほぼ発表されていないのではないか、というのが筆者の認識である。

その様な中、2004年、バーナード・コーンウェルが*The Last Kingdom*という小説を発表し、以来シリーズ化して最新作は11作目となる<sup>13)</sup>。この物語は、正にヴァイキングの侵攻に苦しむアルフレッド王とウェセックス王国が舞台となっている（が、主人公はアルフレッドではない）。アングロ・サクソン時代の王道とも言えるアルフレッド大王時代を舞台にした大人向け歴史小説で、2015年以降、BBCとNetflixによりテレビドラマ化されている。

ここで注目したいのは、コーンウェルの小説は、シリーズ名が*The Saxon Stories*（または*The Alfred Series*）であるのに対して、テレビドラマの方はシリーズ名が*The Last Kingdom Series*であるということである<sup>14)</sup>。つまり、“Saxon”の表記が消えているのである。

ウェセックス（Wessex）王国は、「西のサクソン」という意味で、サクソン人が作り上げた王国である。従って、コーンウェルのシリーズ名は妥当であると考えられる。アルフレッド王の時代、未だ「イングランド王国」は存在していなかった。あくまでも、彼らは「サクソン人」であり、侵攻して来るヴァイキング（この時代にはデーン人）に対して、如何に自国を守るかということが至上命題だったのである。その意味では、アルフレッド王は「イングランド王」では無い。しかし、上述の通り、彼がいなければ後のイングランドはおそらく存在しなかったか、全く異なる文化を持つ社会がブリテン島に成立していたかもしれない可能性（歴史のif）を考慮に入れると、やはりアルフレッドは「アングロ・サクソン時代」を代表する人物なのである。

では、何故、“Saxon”の表記が消えたのか。答えは推測の域を出ないが、一つ可能性として考えられることは、現代社会において“Saxon”は「ドイツ」を連想させようという点であり、それをテレビシリーズ放映側は避けようとしたのではないか、という考えである。特に、テレビドラマの第1シーズンが、BBC America 主導で放映されたという事実は考慮に値するであろう<sup>15)</sup>。

現代社会において「イングランド」または「英国」を表すのは“Anglo-”であるが、アングル人が作り上げた王国は、7王国の中で、最初に覇権（overlordship）を振るい、かつ最初にヴァイキングに滅ぼされた北の2王国であって<sup>16)</sup>、サクソン人の王国では無かった。つまり、アルフレッド王の時代には、未だ「ウェセックス王国」という国家概念だったのである。だが、アルフレッドの孫のアセルスタンは、ヴァイキングが支配する地域の征服を成し遂げてイングランドを統一し、初めて「イングランド王」を名乗ることになる。以降、「アングロ・サクソン7王国」ではなく「イングランド王国」の時代となり、それは1016年にデンマークのクヌートが、次いで1066年にノルマンディーのウィリアムがイングランド王を名乗るようになっても、変わら無かったのである。

一口に「アングロ・サクソン時代」と言っても、そこには二つ（実際にはそれ以上）の民族が含まれ、興っては滅んだ王国も複数あった。そして、アングロ・サクソン人は、彼ら独自の神話も文学作品も残していないのである<sup>17)</sup>。この様な、複雑で微妙な「アングロ・サクソン時代」であるがゆえに、小説や映画、その他サブ・カルチャーの分野では利用・応用し辛く、結果人氣が無い状態になっているのではないか、というのが筆者の考えである。



## 5. おわりに

ローズマリー・サトクリフが亡くなって20年以上。もはや、彼女の新しい作品が世に出ることも、筆者の疑問に答えが与えられることも無いであろう。また、児童文学の分野での彼女の評価はすでに固定されており、かつ、常に新しい作家・作品が次々と現れる状況では過去の作家として、研究対象から外されていく傾向にある。このこと自体は、時の流れとして抵抗しうることでは無いのかもしれない。

しかし—— 歴史小説というジャンルは、死んではいないはずである。

コンピューター技術の発達により、数世代前は不可能と思われていたことが可能になり、CG映画やCGアニメ、端末ゲームにオンラインゲームと、新しい媒体に対してより適した題材が扱われるようになり、結果、ファンタジー要素の多い作品が数多く世に生み出されている。そのファンタジーの世界では、もともとの性別や敵味方の区別、人かものか獣かという区別等、長い人類の歴史の中で当然と考えられていたものが覆され、眉を顰める大人達を尻目に、大人達も含めた受け取り手に受容されている。この流れが、変わることはおそらく無いであろう。

そうであれば、歴史小説という分野が、テレビドラマと提携し、それがネット配信される現状は、時代の流れに乗った当然の在り方であると考えられる。重要なことは、歴史小説という分野を無くさず、新しい可能性を探り続けることではないだろうか。その意味では、「アングロ・サクソン時代」はまだまだ可能性を秘めた、小説、映画、そしてサブ・カルチャーの分野において多くのアイデアを提供する時代設定・舞台設定であると、筆者は主張したい。

今までは、「アングロ・サクソン」は人気が無かったかもしれない。だが、それは、今後も人気が無い、ということの意味するものではないはずである。いや、「アングロ・サクソン」は面白いのだ。一度、その世界に足を踏み入れてみれば、それがよく分かるはずである。そう、大英図書館での特別展へ発作的に出かけてしまう筆者のように<sup>18)</sup>。

## 注

- 1) 『はじめて学ぶ英米児童文学史』 pp.153-54
- 2) 筆者は、サトクリフのすべての小説を本稿で網羅するわけでは無いが、議論の対象となる小説については以下の表にまとめてある。
- 3) 網掛で示された「共通の特徴」とは、以下に論じるサトクリフの歴史小説に共通して見られる特徴のことであり、その特徴が特に顕著に表れている小説に対して言及している。
- 4) 日本語訳は、別の2つの短編と合わせて『三つの冠の物語 ヒース、樅、オリーブ』（2003）に収録されている。
- 5) 同上。
- 6) 『第九軍団のワシ』 p.378
- 7) かつ、サトクリフの小説の主人公は、ほとんど男性である。それは、彼女自身の身体的障害と、それが理由の大切な人との理不尽な別れが影響していると考えられる。サトクリフが描く女性の幸せはほんの数行であり、だが、それゆえに凝縮されている。（『闇の女王にささげる歌』 p.258）
- 8) 『運命の騎士』 p.394
- 9) 『ケルトとローマの息子』 p.429
- 10) イギリス児童文学の概説書類がサトクリフを論じる場合は、ほぼこの『第九軍団のワシ』を彼女の代

表作として挙げている。それ以外には、『ケルトの白馬』がファンタジー小説扱いで『大人のファンタジー読本』（2006）で案内されている。

もっとも、すべてのイギリス児童文学概説書類でサトクリフが論じられているわけではなく、もはや過去の作家として注目度が低くなってきている感は否めない。

- 11) 筆者は、ある大学でのある授業終了後、「先生の授業を聞いて初めて、アーサーってももとは男の人だったんだと知りました。」と、オンラインゲームでアーサーを知ったという学生から感動の言葉ももらった経験がある。
- 12) 原題はそれぞれ、*The Namesake* (1964), *The Marsh King* (1967) である。
- 13) 「炎のシャープ」というナポレオン戦争時の英国軍人シャープを主人公とした作品で非常に有名な作家であり、日本語訳もかなりの数の小説が出版されている。だが、この *The Last Kingdom* シリーズは、未だ日本語訳は出版されていない。

<http://www.bernardcornwell.net/> 参照。

- 14) <http://www.thelastkingdom.tv/> 参照。
- 15) BBC America は第2シーズンで放映から手を引き、代わりに Netflix が参入した。
- 16) アングル人が作り上げ、最初に覇権を握ったがゆえに、Angla land (アングル人の土地) → England となった。English (← Anglisc) も同様。
- 17) 古英語で書かれた有名な英雄叙事詩 *Beowulf* については、従来「英文学」の中に含まれるが、実際の舞台はブリテン島ではなく、登場する人物も北欧系の民である。おそらく、大陸からブリテン島に移住して来る以前の、大陸時代のアングロ・サクソン人が持っていた伝承が、後の時代に古英語という言語で書き残されたと考えられるので、ここでは考慮外とする。同じ理由で、サトクリフもこの英雄の物語を小説にしているが、本論では論じない。

また、ここで言う文学作品とは、俗文学である。キリスト教を基にし、キリストを讃える作品は、韻文で残されているが、本論では「文学」作品とは見なさない。

- 18) The Special Exhibition "Anglo-Saxon Kingdoms: Art, Word, War" The British Library, 19 Oct. 2018 – 19 Feb. 2019.

## 参考文献

### 《和書》

- 桂宥子・牟田おりえ編著 (2004) 『はじめて学ぶ英米児童文学史』 ミネルヴァ書房  
定松正・本多英明編 (2001) 『英米児童文学辞典』 研究社  
定松正 (2004) 『イギリス児童文学紀行』 玉川大学出版部  
サトクリフ、ローズマリー、猪熊葉子訳 (1969) 『ともしびをかかげて』 岩波書店  
——、猪熊葉子訳 (1970) 『運命の騎士』 岩波書店  
——、猪熊葉子訳 (1972) 『第九軍団のワシ』 岩波書店  
——、猪熊葉子訳 (1973) 『王のしるし』 岩波書店  
——、猪熊葉子訳 (1985) 『思い出の青い丘 サトクリフ自伝』 岩波書店  
——、猪熊葉子訳 (1994) 『銀の枝』 岩波書店  
——、灰鳥かり訳 (2000) 『ケルトの白馬』 ほるぷ出版  
——、山本史郎訳 (2001) 『アーサー王と円卓の騎士』 原書房  
——、山本史郎訳 (2001) 『アーサー王と聖杯の物語』 原書房  
——、山本史郎訳 (2001) 『アーサー王最後の戦い』 原書房  
——、井辻朱美訳 (2002) 『ペーオウルフ 妖怪と竜と英雄の物語』 原書房  
——、猪熊葉子訳 (2002) 『辺境のオオカミ』 岩波書店

「アングロ・サクソンの欠如」 = アングロ・サクソンは人気が無い？ (藤井)

- , 乾侑美子訳 (2002) 『闇の女王にささげる歌』 評論社
- , 金原瑞人・久慈美貴訳 (2002) 『ヴァイキングの誓い』 ほるぷ出版
- , 灰鳥かり訳 (2002) 『ケルトとローマの息子』 ほるぷ出版
- , 本間裕子訳 (2002) 『アネイリンの歌 ケルトの戦の物語』 小峰書店
- , 山本史郎訳 (2002) 『剣の歌 ヴァイキングの物語』 原書房
- , 山本史郎・泰子訳 (2002) 『落日の剣 (上・下)』 原書房
- , 山本史郎訳 (2003) 『シールド・リング ヴァイキングの心の砦』 原書房
- , 山本史郎訳 (2003) 『三つの冠の物語 ヒース, 樫, オリーブ』 原書房
- , 山本史郎訳 (2003) 『山羊座の腕輪 ブリタニアのルシウスの物語』 原書房
- , 灰鳥かり訳 (2004) 『夜明けの風』 ほるぷ出版
- , 山本史郎訳 (2004) 『ロビン・フッド物語』 原書房
- サルウェイ, ピーター, 南川高志訳・解説 (2005) 『1冊でわかる古代のイギリス』 岩波書店
- ホッジズ, C. ウォルター, 神宮輝夫訳 (1971) 『アルフレッド王の戦い』 岩波書店
- , 神宮輝夫訳 (1977) 『アルフレッド王の勝利』 岩波書店
- 本多英明・桂宥子・小峰和子編著 (2000) 『たのしく読める英米児童文学 作品ガイド120』 ミネルヴァ書房
- やまねこ翻訳クラブ編 (2006) 『大人のファンタジー読本 未知なる扉をひらく180選』 マックガーデン

#### 《洋書》

- Cornwell, Bernard. *The Last Kingdom*. (paperback) London: Harper Collins, 2005.
- , *The Pale Horseman*. (paperback) London: Harper Collins, 2006.
- , *The Lords of the North*. (paperback) London: Harper Collins, 2007.
- , *Sword Song*. (paperback) London: Harper Collins, 2008.
- , *The Burning Land*. London: Harper Collins, 2009.
- , *Death of Kings*. (paperback) London: Harper Collins, 2012.
- , *The Pagan Lord*. (paperback) London: Harper Collins, 2014.
- , *The Empty Throne*. (paperback) London: Harper Collins, 2015.
- , *Warriors of the Storm*. (paperback) London: Harper Collins, 2016.
- , *The Flame Bearer*. (paperback) London: Harper Collins, 2017.
- , *War of the Wolf*. London: Harper Collins, 2018.

#### 《WEB サイト》

- “Bernard Cornwell” <http://www.bernardcornwell.net/> (最終検索日 2019年2月9日)
- “The Last Kingdom” <http://www.thelastkingdom.tv/> (最終検索日 2019年2月9日)

